

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：52605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370262

研究課題名(和文) 言文一致運動と近代における短歌表現の研究

研究課題名(英文) A Research on the Vernacular Movement and the Expressions in Early-modern Tanka.

## 研究代表者

河野 有時 (KONO, ARITOKI)

東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・教授

研究者番号：70290723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言文一致運動が伝統的な和歌の革新と近代短歌の成立にどのような影響を与えたかということについて明らかにしようとするものである。言文一致運動を背景に、散文世界では次第に「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」といった時の助動詞は失われていった。だが、短歌はそれを残し、残しながら短歌表現として近代化を推進めたのである。それは、一人称の現代的な発話たる短歌の表現に地の文の末尾を席捲した助動詞の「た」が位置しにくかったためだった。そこで、近代の短歌は、動詞の終止形止めやテイル形を用いることによって、時の表現に膨らみをもたせた。石川啄木の『一握の砂』に見られる諸歌はその代表と位置づけられる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate how the Vernacular Movement influenced the reformation of traditional Waka and establishment of early modern Tanka. In the context of the Vernacular Movement, particles such as 'Tsu', 'Nu', 'Tari', 'Ri', 'Ki', and 'Keri' had gradually disappeared from the prose style. However, they remained in Tanka, which left them as it modernized itself. It is due to the fact that an auxiliary 'Ta', which was widespread as an end marker in descriptive texts, did not match Tanka with lively utterances from the first-person point of view. For this reason, early modern Tanka enriched temporal expressions with verbs of 'Te-iru' and end-forms. Verses in Takuboku's "Ichiaku no suna" are regarded as the representatives.

研究分野：日本近代文学

キーワード：近代短歌 石川啄木 一握の砂 池塘集 動詞の終止形 テイル形 サラダ記念日 言文一致

### 1. 研究開始当初の背景

石川啄木は詩論「弓町より(食ふべき詩)」の中で、

「あゝ淋しい」と感じた事を「あな淋し」と言はねば満足されぬ心には徹底と統一が欠けてある。(中略)「あゝ淋しい」を「あな淋し」と言はねば満足されぬ心には、無用の手続きがあり、回避があり、胡麻化しがある。

と書いている。また、歌論「一利己主義者と友人との対話」では

「いかにさびしき夜なるぞや。」「なんてさびしい晩だらう。」「どつちも七五調ぢやないか。」

とも述べて、「現代の言葉に近い言葉を使うことを主張した。啄木だけはなかっただろう。詩歌の言葉に対して、時代にそぐわなくなっているとの印象をもっていた詩人や歌人は少なくなかったはずだ。例えば、近代詩史に照らせば、口語自由詩が成立していく過程はそのことをよく物語っているように思われる。しかし、短歌は時代に適応できないから滅びるという滅亡論と、新しい地平を切り開こうとする口語短歌の試みを繰り返しながら、「口語か文語か、という選択ではなく、いかに口語を取り入れ、文語を取り入れ、それぞれをどう生かすか、というところ」(『岩波現代短歌辞典』1999・12)へ辿り着いた。当の啄木として「短歌の叙述を口語に切り換えようと考えたわけでは、たぶんなかった」と歌人の今野寿美は指摘している(「口語発想の文語文体」(『短歌』平22・11))。多くの歌人が、古い用語と今日の思いとのズレを意識しながらも、口語自由詩のように、短歌が一気に口語体へ移行しなかったのはなぜだろうか。

今日においても、短歌は「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」という時の助動詞が用い続けている。だから、そうでない「口語短歌」は、あくまでも特別な試みとして位置づけられてきたのである。これまで短歌において口語体が主流とならなかったのは、短歌が伝統詩であるからだと思われてきたが、本研究では、短歌における文語と口語の問題を表現の問題として捉え直したいと考えた。いかに伝統詩であろうとも、言語の近代化と無縁ではいられなかったはずだからである。そこで、言語の近代化たる言文一致運動が近代短歌の成立にどのような影響を与えたか、あるいは与えなかったかを、ここに明らかにしていこうとしたのである。

### 2. 研究の目的

本研究は、近代の日本において思想や感情の表現に適した口語体の書き言葉が形成されていく過程にあつて、言文一致運動が伝統的な和歌の革新と近代短歌の成立にどのような影響を与えたかを考察するものである。従来の近代短歌研究は口語短歌を自然主義の影響によって派生的に生じたものと見て、その試みを歌人の詠作態度に関連させて論

じてきた。そのため、和歌史の中では口語短歌はあくまでも一時的な試みに過ぎず、固有の表現の問題として取り上げられてはこなかったのである。しかしながら、本研究では口語短歌を言文一致運動と関連させることで、近代短歌における口語体とはどのような表現上の問題を含み込んでいたのかについて明らかにする。また、口語体の可能性や口語体をもってする困難さからは、表現機構としての近代における短歌の性格を捉え直すことができよう。

考察にあたっては、散文における言文一致が、「だ」体(二葉亭四迷)、「です」体(山田美妙)、「である」体と(尾崎紅葉)いうように文末表現の特徴によって論じられていることを背景に、短歌においてはその歌末表現に注目し、言文一致運動が近代短歌に与えた影響の諸相を見定め、言文一致運動の影響を受けながら確立されていった近代の短歌文体の特質とその口語短歌運動への影響を明らかにすることを目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究では、まず近代の諸歌集〔与謝野鉄幹『東西南北』(明29・7)、金子薫園『かたわれ月』(明34・1)、与謝野晶子『みだれ髪』(明34・8)、佐佐木信綱『思草』(明36・10)、尾上柴舟『銀鈴』(明37・11)、正岡子規『竹の里歌』(明37・11)、山川登美子他『恋衣』(明38・1)、窪田空穂『まひる野』(明38・9)、相馬御風『睡蓮』(明38・10)、落合直文『萩之家歌集』(明39・6)、青山霞村『池塘集』(明39・12)、平野万里『わかひ日』(明40・3)、若山牧水『海の声』(明41・7)、前田夕暮『収穫』(明43・3)、金子薫園『覚めたる歌』(明43・3)、与謝野鉄幹『相聞』(明43・3)、吉井勇『酒ほがひ』(明43・9)、石川啄木『一握の砂』(明43・12)、土岐哀果『黄昏に』(明45・2)、北原白秋『桐の花』(大2・1)、斎藤茂吉『赤光』(大2・10)〕を対象として、

- ・歌末が「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」といった時の助動詞の歌。
  - ・結句が動詞の終止形止めによって結ばれている歌。
  - ・助動詞「た」を用いている歌。
  - ・テイル形で終止している歌
- について調査を行ない、近代短歌における歌末表現の特徴を整理した。

次に、わが国最初の口語短歌集である『池塘集』について、その口語表現の特質を具体的に考察した。

さらに、動詞の終止形止めの歌については、その修辞性を石川啄木の『一握の砂』におさめられた諸歌を対象として明らかにした。

最後に、テイル形について、啄木短歌から大正期の口語短歌運動のモニュメント的存在である『現代口語歌選』、また『サラダ記念日』に至る現代短歌までの変遷とその意義を論じた。

#### 4. 研究成果

(1) わが国最初の口語短歌集は『池塘集』である。この歌集における口語表現について論じる前にまず確認しておかねばならないことは、「口語短歌」という呼称である。「口語」とは、「ふだん話すときに使われることば」のことで、「口語短歌」とは「ふだんの話しことばで作られた短歌」ということになる。しかし、言文一致運動における「口語」とは、書きことば口語体のことであって、「口語短歌」とは書きことばの口語体によって作られた歌と考えなければならない。だが、短歌においては、この「話しことば」と「書きことば口語体」が混用されてきた。それは文字通り「歌」が、たとえば「短歌声調論」がそうであるように、「声」を連想させるためであろう。そのことに留意しながら、『池塘集』及び口語短歌の試みを書きことば口語体のそれとして考察していくものとする。

『池塘集』には、「死の谷を出でゝ歸つたわが兄の戦語にこよひも更けた」「詩選編む松の書樓の村時雨紙窓さむう日が暮れてきた」のような助動詞の「た」で止められた歌が散見する。しかし、この試みはうまくいかなかった。短歌と助動詞の「た」とは相性が悪かったのである。それは、歌末の表現がやせ細るというような問題だけではなく、もっと短歌という詩型にかかわる本質的な問題だった。助動詞の「た」は散文の世界において、「地の文」の成立に力を貸したものだからである。前述のように「声」にたとえられる短歌は、一人称の現在的な発話の体をなしており、透明化した語り手を創出したこの助動詞を簡単に歌末に据えることはできなかった。しかし、それでは、言語の近代化の流れの中で短歌は前近代的なものと難じられてしまう。そこで、短歌は時の助動詞を残しながら、新しい歌末表現を取り込んでいくことになる。それが、(3) (4)に述べる、動詞の終止形止めであり、テイル形による終止だった。

(2) 『池塘集』は明治三十九年十二月に出版された。著者は草山隱者、発行所は草山廬。巻頭に「自題」「自序」を配し、「春草」「莫春」「亞米利加」(目次には「あめりか」)「すまでやは」の四章三百二十七首からなる。この訂正再版が京都のからすき社から大正七年十一月に刊行されており、「初版自序」「再版自序」に続くその目次には、

池塘集	明治四十年以前
草山百首	明治四十年後
續草山百首	明治四十三年後
梨	大正二年後

と記されている。そこで、初版『池塘集』の第一章「春草」と訂正再版『池塘集』の第一章「池塘集」及び『草山の詩』(明四三・一、至誠堂)所収の「草山百首」と訂正再版『池塘集』の第二章「草山百首」を比して対照表を作成した。本文の異同はほとんどが表記上の問題であるが、初版『池塘集』では第二章

の「莫春」に収められていた十五首が、訂正再版『池塘集』では第一章「池塘集」に収録されている。その際におこなわれた改変は訂正再版『池塘集』の口語化示す特徴的のものであることを指摘した。

(3) 近代短歌における動詞の終止形止めの歌について考察を加えた。動詞の終止形止めの歌とは、

東海の小島の磯の白砂に / われ泣きぬ  
れて / 蟹とたはむる

の「たはむる」のように、それで終止する歌のことを指す。考察にあたっては、石川啄木『一握の砂』の諸歌を対照としたのは、この有名な巻頭歌をはじめとし、「停車場の人ごみの中に / そを聴きにゆく」や「ぢつと手を見る」「妻としたしむ」など、動詞の終止形止めが印象的に用いられているからである。動詞の終止形止めは(1)で述べたように、新しい助動詞「た」を軽々に用いることができない短歌にあって、言語の近代化の影響下に短歌が取り入れようとした手法の一つなのである。そもそも、動詞の基本形止めは和歌の時代から、「春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかがりはあらじとぞ思ふ」のように、係り結びをともなって繰り返されてきた行き方だったのである。動詞の終止形で止められた歌には、眼前描写や実況的描写というものや、歌人の現在の思惟や心情の表白のようなものが見られる。ただ、注目すべきは、巻頭歌の「われ泣きぬれて / 蟹とたはむる」のような、「われ」の行為を「われ」が歌う場合であろう。これらの歌では、動詞の終止形が助動詞や助詞を下接せず、積極的な性格を帯びていないために、発話する「われ」の姿を透化させてしまうのである。そのことによって、発話する「われ」の方でなく、「泣きぬれて」いる「われ」の方の像が結ばれることになるのである。さらに、動詞の終止形は、その無標形としての性格から、対となる有標形との関連において意味が決まることを指摘して、それによりそれぞれの歌がかかりあって歌集の世界に広がりを与えていくように機能していることを明らかにした。

(4) 近代から現代の短歌表現におけるテイル形について考察をおこなった。歌末にテイル形を据えた歌は、「子供等はゆふ焼こやけと手を叩き光りの中にとびはねてゐる」「何といふ心細さだ父母にひとりさからひ麥うゑてゐる」のように大正期の『現代口語歌選』や、現代短歌においても「砂浜のランチついに手つかずの卵サンドが気になっている」「まだあるか信じたいもの欲しいもの砂地に並んで寝そべっている」など『サラダ記念日』に多く用いられている。これは「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」といった助動詞が日常の言葉から離れていく過程で、短歌がテンスだけでなく、アスペクトによって時の表現に膨らみをもたせたためであろう。このような歌の初期の例として、『一握の砂』の八十七番歌「何やらむ / 穩かならぬ目付し

て「鶴嘴を打つ群を見てゐる」が挙げられる。「鶴嘴を打つ群を見てゐる」と歌いおさめられた一首では、テイル形が生み出す時間幅に全体が縁取られ、共時的に存在し、収束することなく揺曳し続けていることを明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

河野有時、鶴嘴を打つ群を見てゐる—短歌表現におけるテイル形に関する一考察—、東京都立産業技術高等専門学校研究紀要、査読有、第11号、2017、81-91

河野有時、はだかの動詞たち—啄木短歌における動詞の終止形止めの歌について—、国際啄木学会研究紀要、査読有、第19号、2016、17-25

河野有時、『池塘集』考—口語短歌の困惑—、国際啄木学会東京支部会、査読無、第23号、2015、36-50

河野有時、『池塘集』初版・訂正再販対照表、国際啄木学会東京支部会、査読無、第23号、2015、51-64

[学会発表](計2件)

河野有時、啄木から『サラダ記念日』へ、国際啄木学会東京支部、2017年1月、明治大学(東京都千代田区)

河野有時、啄木短歌における動詞の終止形止めの歌について、2015年5月、明治大学(東京都千代田区)

[その他]

ホームページ等

特になし。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

河野 有時 (KONO, Aritoki)

東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・教授

研究者番号：70290723

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )